

令和元年度ときめき俳句大会入賞作品一覽

《一般の部》

【特選賞】

一四 一人酒母亡き父の晩夏かな 孝雄

【正賞】

一六 花冷や文机にある旅の本 塚越 正人  
三三 豚小屋の豚叫びたる残暑かな 湯本 康二  
三四 向日葵や子は思春期の真つ只中 飯島 慶子  
四〇 藁縄の軋む軒下凍豆腐 山崎 千鶴子

【准賞】

九 連翹やコートを脱いではずむ足 長谷川 みのり  
一〇 老いの手を孫が補い障子貼る 武夫  
一九 君からのメールが届く星月夜 木下 美樹枝  
二二 転勤の町にも慣れて暮の春 佐藤 哲郎  
二五 木の葉落ち青空ぐんと近くなる 内藤 修子

《シニアの部》

【特選賞】

七二 体温を捨てて真白な百合になる 早川 達之助  
五〇九 欲ばらぬふたりの暮らし日脚伸ぶ 中島 貴美子

【正賞】

一五九 ひぐらしや母何度でも同じ問ひ 田村 信子  
一七八 鰯雲ひとりを乗せる路線バス 荻野 栄子  
一九六 小ちんまり暮す卒寿の松の内 吉田 和江  
二六七 そぞろ寒医師の診断加齢なり 戸崎 菊枝  
五七五 ベランダで李白となりぬ月見酒 中島 清

七三一 試験湛水八ッ場に秋の声深む 今井 陽子  
七九三 八十路なほ息の輝きしやぼん玉 吉田 美津江  
八六五 浴衣着て指の先まで女の児 吉澤 八千代

【准賞】

八 母と子と傘を寄せ合ひ門火焚く 萩原 肇  
一〇 応援歌極暑の空を押し上げり 山崎 昭子  
三二 はぎれよき禰宜の祝詞やあきつ過ぐ 小山 泰子  
八五 秋の夜の活字に睡魔からむかな 中山 裕美  
九六 春の闇座敷童子のいる気配 小林 啓子  
一二七 有情とも無情とも見ゆ秋の空 後閑 正奇  
一三五 酒蔵にねむらす麴昼ちちろ 貝瀬 久代  
二二三 藤棚の下は駅です縄電車 金井 幸江  
二二九 終戦日ハガキに遺るゲンキデス 春日井 悦子  
二九六 颱風に閉ぢることなき仁王の眼 小池 はるみ  
三〇五 夕端居通りの声を聞いてをり 土屋 掌  
三一五 曲屋の光陰語る吾亦紅 須賀 宏江  
三六九 割烹着はずす間もなく踊りの輪 吉原 道子  
四四八 イワシぐも食べたくなるよくだものが 佐久間 敦子  
五七二 格子戸のつゞく茶屋街初しぐれ 石川 きく江  
六七六 死に顔を皆褒めている天涯花 長岡 和恵  
七九四 菊日和本に心を太らせて 川野 忠夫  
七九六 身に入むや病身の姉に嘘一つ 大沢 時江  
八〇三 敗戦忌外人怖じし日の記憶 町田 幸子  
九六六 父と子の絆の糸で凧上がる 小畑 吉克

【群馬県長寿社会づくり財団理事長賞】（最高齢者男女各1名）

矢内 信吉 97歳男性 九一六 パラオにてけがせし我は今は無事

九一七 あかぎやまいつも自ぶんを守ってる

飯塚 ハルエ 105歳女性 九一 手を取りて曾孫と散歩菊日和

九二二 お元気でと曾孫の笑顔敬老日

【ときめき賞】（理事長賞をのぞく年齢上位者男女各5名）

〈男性〉

高橋 淳三郎 96歳 三三八 敬老の日夫婦そろって爺訪ね

三三九 栗飯の甘き香りがご挨拶

桑原 晴嵐 94歳 三〇六 夢二の美女憂ひをまとふ春の宵

三〇七 新兵のまま九十三終戦日

定方 英作 94歳 八二八 薫風や添ひて卒寿の共白髪

八二九 介助する汗リハビリに励む汗

酒井 宏治 94歳 九七八 道祖神の声かもしれぬ木の実落つ

九七九 午後の日の移ろい易し里紅葉

早川 達之助 93歳 七一 寒鴉たまに笑ってみたくなる

七二 体温を捨てて真白な百合になる

【ときめき賞】

(理事長賞をのぞく年齢上位者男女各5名)

〈女性〉

浅井 豊子

101歳

九七二

秋しずか俳句たのしむ百才で

九七三

畦を行く僧衣にふれる曼珠沙華

狩野 みつ子

96歳

四七二

七夕に絵文字で願い園児たち

四七三

乱れ咲き人目を引くや寺の萩

小堀 トミ子

96歳

八五四

竹藪に紅引く様なツツヂ咲く

八五五

身のほどの俳句を詠むとは老婆なり

恩田 つね

96歳

八七〇

柿落葉自然画伯は見事なり

八七一

機械化の田植四隅を人の手で

土屋 政子

96歳

九〇八

国挙げて即位の祝賀菊日和

九〇九

今年米下げて仲間の旅帰り